

## 巻頭言

## 会長退任の挨拶



佐藤 誠

東京工業大学

2 年前の春に岸野前会長から引き継ぎをしてから、瞬く間に月日が流れて、この度退任の挨拶をさせていただくことになりました。館先生、原島先生、そして岸野先生と歴代の会長によって築かれた NPO 法人としての本学会をそのルールに沿って軌道にのせていくことが、私の務めであると会長挨拶に書かせて頂きました。どこまでその任を全うすることができたのか、些か心許ないのですが、何とかバトンを落とすことなく、新会長である廣瀬先生に引き継ぐことができそうなので、少しほっとしているところです。

この 2 年間の学会の活動について、思いつくままに振り返ってみることにいたします。

一昨年 9 月には奈良先端科学技術大学で第 13 回の日本 VR 学会大会が開かれました。USJ でのイブニングセッションも楽しかったのですが、特に印象に残っているのは特別セッション「電脳コイル」でした。斬新な内容、熱気あふれる会場、そして企画いただいた若い世代の会員の方々のパワーを感じました。昨年の秋は、会場を再び東京に戻して、都の西北、早稲田大学で第 14 回大会が開かれました。新型インフルエンザの影響が心配されたにも関わらず、500 名近くの参加者を得て、過去最大の大会となりました。懇親会でのダンスパフォーマンスを含めて多彩な企画が組まれて、会場の隅々まで熱気にあふれていました。

大会長を引き受けていただいた千原先生と橋本先生をはじめとして両大会の運営に携わっていただいた関係者の皆様にあらためてお礼を申し上げます。年に一度の大会はやはり学会のメインイベント。これからも、本学会らしく形に囚われない魅力に溢れた大会が続くことを願っております。

国際学生対抗バーチャルリアリティコンテスト (IVRC) 本大会、インタラクティブ東京 (i-tokyo)、それから ASIAGRAPH など、毎年秋には様々な催しが開かれます。いずれも工学と芸術との融合を目指す学際的研究分野の活動を支える催しであり、本学会の発足当初から力をいれてきました。昨年は経産省の主催する Digital Content Expo との連携により、今まで以上に活気のある開催となり、数千人もの来場者を迎えることができました。広く社会への啓蒙、普及の場として本学会がこれからも大事にしていかなければいけない活動です。

もう一つ忘れてはならない本学会らしい企画に VR 文化フォーラムがあります。一昨年の 11 月には「鉄道とシミュレータ」がさいたま市にある鉄道博物館で開催されました。蒸気機関車 D51 のシミュレータの制作者である向谷実氏による開発秘話の紹介がとても興味深く印象に残っています。昨年は 7 月 22 日の皆既日食に合わせて河口先生の出身地である種子島で VR 文化フォーラムが開催されました。豊かな自然環境に包まれての日食観察、講演会、上映会、懇親会と充実したひと時を過ごすことができました。これらの催しを企画、運営していただいた関係の皆様方にあらためて御礼を申し上げます。

日々の学会活動にも触れておきたいと思います。年 4 回の学会誌はユニークなテーマの特集や興味深い話題が満載でした。論文誌は特集論文と一般論文を合わせて年間 50 本あまりの論文を掲載していただきました。研究委員会に関しては、四つの委員会が新設され、10 余りの研究テーマでの充実した活動が進められました。毎月、電子メールで送られてくるニューズレターには、会議報

告や各種案内などの貴重な情報が載り、会員と学会とを結ぶ貴重な情報チャンネルの働きを果たしてくれました。これらの活動は、それぞれ関連委員会の委員の皆様方のボランティア活動に支えられてきました。

2年前に岩田先生が中心となって準備を始めていただいた VR 技術者認定制度については、一昨年の試行段階を経て、ようやく今年の4月に VR 技術者認定試験（ベーシックコース）および講習会が開かれる運びとなりました。本学会の社会貢献の大事な活動の一つとして、一歩ずつ充実させながら立派な認定制度に育てていかなければならないと考えております。ご準備をいただいた関係の皆様方には今後ともよろしく願います。

関連して、この講習会で使用することのできる教科書を編纂するための出版委員会が館先生のリーダーシップの下に作られました。そして、執筆、編集を担当された委員の皆様方のご協力により、「バーチャルリアリティ学」という書名で本年1月に発刊することができました。会員の皆様方には是非ご購入いただければと思います。なお、出版元の工業調査会の新聞広告には次のように表されていました。「情報ネットワークの進展に同調して新たな人工環境を生み出しつつある VR を普遍性、一般性のある事柄を中心に記述した画期的なテキスト。VR 学会が総力をあげて編纂。」

振り返れば、とても短い2年間でありました。非才な

身でありながら、何とか務めることができましたのも、廣瀬副会長と榎並副会長をはじめとする理事の皆様方のご協力のおかげであります。原島監事、岸野監事そして館元会長からもいつも温かいご助言をいただきました。それから、事務局の皆様にも大いに助けていただきました。最後になりましたが、会員の皆様方には様々なところで本学会のためにご協力、ご支援をいただきました。ここに、心より感謝したいと思います。ありがとうございました。

前述の「鉄道とシミュレータ」の向谷氏が D51 シミュレータに関して機関車運転のテクニックを話されました。機関車をうまく走らせるには、石炭のくべ方が大事だそうです。罐のどの場所にどのくらいくべるのか、数キロ先のレールの状況を見越して行わなければいけません。水の分布を考えると、先に登り坂があれば前もって手前にくべておかなければいけません。反対に先が下り坂のときは前もって奥にくべておく必要があります。本学会は今年で15年目を迎えます。これからの学会の運営も平坦なレールばかりでなく、山あり谷ありのレールを進まなければいけなくなることもあるかもしれません。先々のことを考えた運転が求められるようです。幸いにも廣瀬新会長は鉄ちゃんのご出身と伺いました。安心して運転席を交代することができます。VR 学会が NPO レールの上を快調に走り続けて、さらに前進することを心より願っております。

#### 【略歴】

佐藤 誠 (SATO Makoto)

東京工業大学 精密工学研究所 教授

1951年名古屋生まれ。1978年東京工業大学大学院電気工学専攻博士課程修了、工学博士。現在同研究所教授。東京工業大学総合理工学研究科知能システム科学専攻教授を併任。専門は知覚情報処理メカニズムの解明とそのバーチャルリアリティやヒューマンインタフェースへの応用。VR 世界に直接触れるための蜘蛛の巣状ハプティックインタフェース SPIDAR やマルチプロジェクション / マルチ PC / マルチモーダルの没入型 VR 環境の研究開発に従事。